

研究交流計画の目標・概要

【研究交流目標】 交流期間(最長5年間)を通じての目標を記入してください。実施計画の基本となります。
(自立的で継続的な国際研究交流拠点の構築と次世代の中核を担う若手研究者の育成の観点からご記入ください。)

古代の西アジアでは、地球上の他の地域に先駆けて農耕、牧畜、冶金、書字術といった革新的技術、あるいは都市や国家のような人間社会の根本制度が「発明」され、さらには数学などの自然科学や一神教的な宗教伝統なども誕生した。このように人類史に絶大なインパクトを残した古代西アジアの歴史は単なる地域史ではなく、現在まで続く人類共有のグローバルな文明史における「最初の1ページ」であり、その文化遺産は人類社会全体にとっての価値ある財産である。この古代西アジアの研究は、近代西欧による植民地政策のなかで東洋学(オリエント学)の一分野として始まった。現在では西アジア現地を含む世界各地で研究が推進されているものの、研究の中心は今もヨーロッパにあり、古代西アジアにおける人類文明の黎明は今も専ら「西欧史観」の枠組みの中で研究されている。この問題はヨーロッパや西アジア現地の専門家も熟知しており、支配・被支配、研究主体・研究客体の枠組みを脱却した古代西アジア研究の真のグローバル化が志向されているものの、それはヨーロッパ・現地とは異なる「第三極」の研究拠点による協力なしには難しい。この状況の中、我が国においても20世紀後半頃から古代西アジア研究は言語学・歴史学・考古学などの各分野において推進され、国際的に高い評価を受けてきた。さらに、戦争などによって疲弊した西アジアの文化遺産の保護活動も我が国のイニシアティブによって進められ、日本は「第三極」の筆頭として名乗りを上げている。特に筑波大学には2021年度に重点育成研究拠点として古代西アジアを包括的に研究する「西アジア文明研究センター」が設立され、国際拠点形成の基礎が敷かれている。

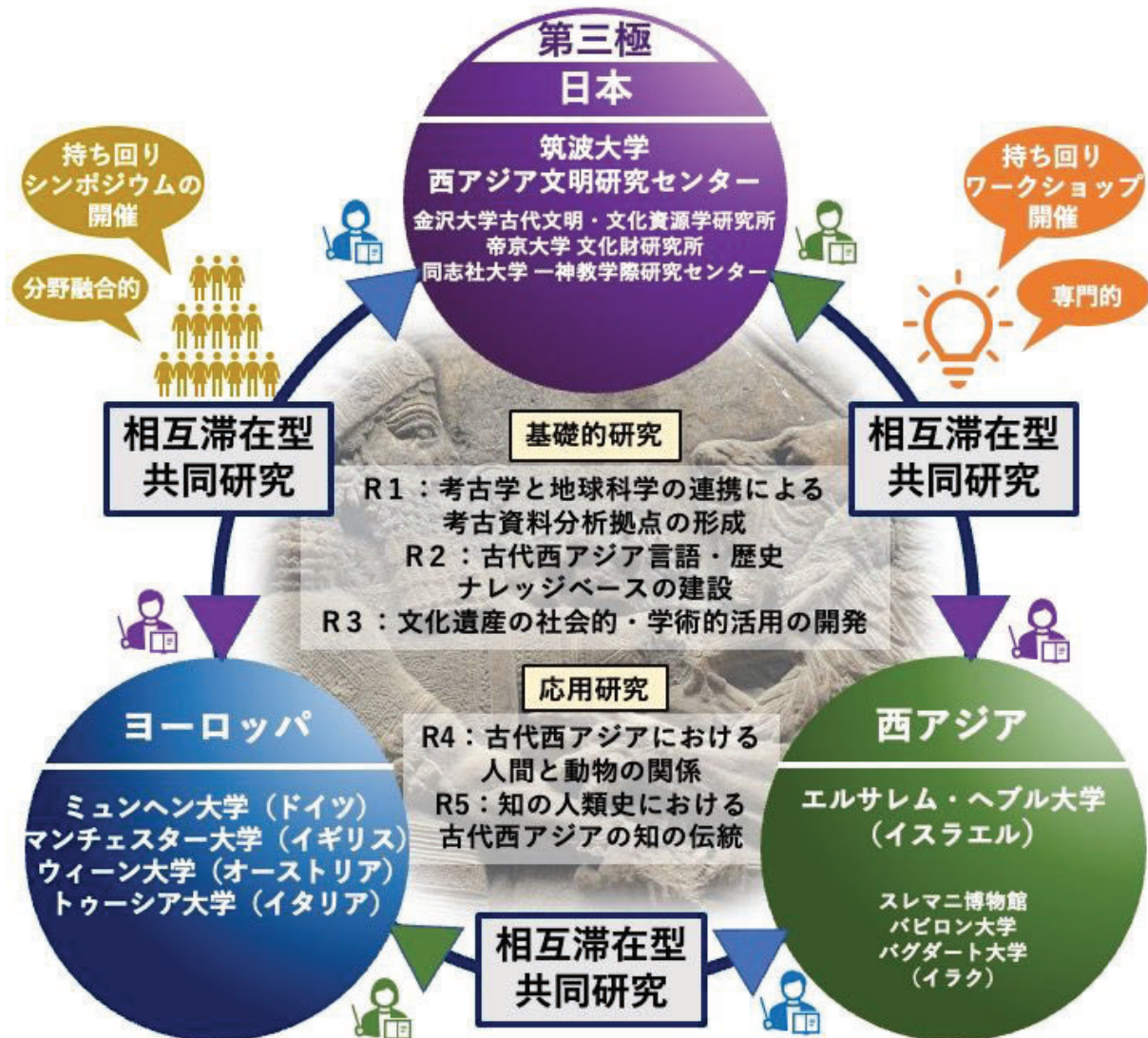
本計画では、これまで各分野において個別に作られてきたネットワークを統合・拡充し、組織的かつ分野横断的な研究交流を実施することによって、現地・ヨーロッパ・第三極の世界共同で古代西アジアを研究し、その文化遺産を国際社会が協働で守り、活用する体制を構築する。それによってヨーロッパの植民地政策によって押し付けられてきた歴史観を脱却し、グローバルな市民が共有できる新しい歴史観の構築を目指した国際研究拠点を我が国に建設する。さらに、各地の研究拠点が国際共同で次世代を育成するプラットフォームを建設することにより、この国際拠点を持続可能なものとする。

【研究交流計画の概要】 我が国と交流相手国の拠点同士の協力関係に基づく多国間双方向交流として、どのように①共同研究、②セミナー、③研究者交流を効果的に組み合わせる実施するか、研究交流計画の概要を記入してください。

本事業は、ヨーロッパにおける古代西アジア研究の諸分野において長きに亘り重責を担ってきたドイツのミュンヘン大学、イギリスのマンチェスター大学、オーストリアのウィーン大学、イタリアのトゥーシア大学、そして西アジア現地にあつて研究を牽引するイスラエルのエルサレム・ヘブライ大学を交流相手とし、研究拠点の形成に直結する三領域の基礎的研究(R1「考古学と地球科学の連携による考古資料分析拠点の形成」、R2「古代西アジア言語・歴史ナレッジベースの建設」、R3「文化遺産の社会的・学術的活用の開発」とそれら基礎的研究と連動する二件の応用研究(R4「古代西アジアにおける人間と動物の関係」、R5「知の人類史における古代西アジアの知の伝統」)を共同で実施する。これらの共同研究の遂行のため、事業に参加する研究者(特に若手研究者)が相互に交流相手の研究機関に滞在し、さらに、これらの共同研究に関連する具体的な主題を設定したセミナー——分野横断で実施する大規模なシンポジウムとより専門的なワークショップ——を参加国が持ち回りで開催する。共同研究並びにドイツと日本で開催するセミナーにはイラクのバビロン大学、バグダード大学、スレマニ博物館の協力研究者もゲスト参加する(費用は主催国負担)。

[実施体制概念図] 本事業による経費支給期間(最長5年間)終了時までに構築する国際研究交流ネットワークの概念図を描いてください。

古代西アジア研究の国際拠点形成



西欧植民地主義的な構図からの解放
真の世界協働による古代西アジア研究
グローバルな市民が共有できる新しい歴史観